

発達障害のある子どもの教育相談に関するQ&A

国立特別支援教育総合研究所

落ち着きのない子どもの家庭での対応方法を教えてください。

落ち着きのない子どもといっても一人一人落ち着きのなさの原因は様々です。それぞれの子どもにあわせて対応する必要があります。

例えば、よく宿題を忘れてしまう子どもの場合でも、宿題が出たことを忘れてしまっているのか、宿題が出たこと自体を聞いていなかったのかでは対応の方法が異なります。

前者の場合は、帰ってきた時点で宿題があるかどうかを聞いて、できない場合は保護者が一緒に宿題をするということを習慣にすれば対応可能ですが、後者の場合は担任の先生に協力してもらい、宿題のある日は連絡帳に宿題があることを記入してもらうなどの工夫が必要になるでしょう。

注意が必要なのは、子どもの失敗に対してあまりに先回りして関わることで、本人の自己評価が下がる可能性もあります。

文部科学省が平成16年に出した「小・中学校におけるLD（学習障害）、ADHD（注意欠如／多動性障害）、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）では、LD、ADHD、高機能自閉症児へ家庭でできることとして、愛情のメッセージを絶やさない、子どもと保護者の信頼関係の樹立、他の子どもの発達との違いを見極めること、細かいことはあまり注意しないこと4つを挙げています。

この様なことに注意しながら、担任の先生などと相談しながら、子どもの苦手な部分について対応していく必要があると考えられます。

本人の注意が欠落しているのか、育て方のために未熟なのか、子どもの状態を見てもらい、子育てへのアドバイスをください。

不注意なる要因には以下の点があげられます。

いろいろな刺激に影響を受けやすいこと、多くの刺激から必要なことを選択すること

が難しいこと、少しの情報で判断してしまい衝動的に行動してしまうこと、自分の行動を振り返ることが苦手であることなどです。

本人に不注意的な行動が見られたとき、原因を突き止めるのにかかわるのではなく、本人の困り感に対してどうするかを考えていきます。

子どもの行動にもそれなりの理由がありますので、頭ごなしにしかるのではなく、まず子どもの気持ちに共感することが大切です。子どもの行動の特徴を理解し、本人の努力を評価しつつ、注意の集中を保てるように働きかけたり、環境を整備したりしてください。

人の気持ちを察することができず、家族以外の人とのコミュニケーションがとれません。 どうしたらよいでしょうか。

家族とは、普段から関わりが多いため、行動等をパターンとして理解しやすいと考えられます。しかし、家族以外の人の場合、どのような反応をする人なのか、その人への理解の仕方等が分からないため戸惑ってしまうと予想されます。

コミュニケーションを取るには、相手の人の表情を読み取ったり、場の雰囲気をつかんだりして、状況に合わせた言動をとることが求められます。

そのため、生活の中で相手の人が今感じたことを言語化する、場の状況をことばで説明する、数人の中で相手に合わせた行動をとるなどの練習をするといいいでしょう。

最初は、絵カードを使いながら遊びとして取り組み、次にビデオ等の映像を通して考える練習をし、最後に具体的な場面で練習をするといいいと思います。

字の認識が全く逆です。どのように指導すればいいですか。

小学校へ入学しても、しばらくは鏡文字で書く子どももいます。国語の時間に字の練習をしていくにつれ、正しい文字が書けるようになる子もいるのですが、その中に

何人か特別に配慮した指導の必要な子どもがいます。

鏡文字になる要因として考えられることに、形を正確に捉えることが難しい、形を正確に記憶することが難しい、目と手を協応させることが難しい、左右上下など位置関係を理解することが難しいなどが考えられます。

練習の内容として、目と手の協応（線結びなど）・位置関係の練習（左右・上下関係）・左右の位置関係の間違い探し等があげられます。また、字を書くときには、ことばによる意味づけを行ったり、マス目の大きい用紙を使ったりするなどの配慮が必要です。

協調性がない子どもへの対応をどうしたらよいでしょうか。

協調性がないという現象だけで子どもを見ないことが大切です。

子どもの行動には原因があるので、その背景を考えることです。親子関係や友達関係等が良好であるかどうか、子どもの育ちの中で考えられる原因はないかどうかです。その原因から対応を考えていくことになります。

また、発達障害等のため、周りの状況が読めなかったり人の感情が読み取りにくかったりすることも考えられます。その場合、発達障害のある子どもへの対応を行うことになります。

I Qが高いことで友達とうまくつきあうことができません。どうしたらよいでしょう。

I Qが高いから友達とうまくつきあえないのではなく、興味関心や話の内容が相手の子どもと違うことによりうまくつきあえないと考えられます。

友達とつきあうにはどうしたらいいのかという具体的な関係の持ち方を、子どもと一緒に考えます。相手の気持ちを理解したり、相手に合わせたりすることを具体的な場面に即して行います。

友達関係が深まらず、友達がいない子どもにどう対応したらよいでしょう。

教師が、友達をうまくつukれない子どもと一緒に、他の子どもと遊ぶ場面をもつことです。体を使う遊び、座りながらできる遊び、ゲームなど様々な遊びを教師が入って進めていくことで、仲間関係を作っていきます。

低学年の場合はこのようにしていった方がいいのですが、高学年になると教師が調整するだけでは難しくなります。周りの子どもが一人である友達をみて、どうしたらいいのか考えさせる場面をつくることも必要になります。

また、友達がいない子どもに対しては、自分から友達に働きかけていけるような仕掛けを作ったり、モチベーションを高める関わりをしたりすることも必要です。

人の気持ちを察することができません。どのように接したらよいでしょうか。

相手の表情とその場の状況から相手が何を考えているのか読み取ることの大切さを話していきます。

話だけでは難しいので、状況の絵を提示し、人物の行動と気持ちを一緒に考えていきます。また、ロールプレイを通して相手の気持ちを考えたり、自分の取るべき行動を考えたりすることも必要です。

ことばが遅く、社会性が乏しい子どもに対して、どのように対応したらよいでしょうか。

ことばが遅い子どもは、自分の気持ちを伝えたり、説明したりすることがうまくできません。また、相手のことばの意味が分からなかったりして、うまくコミュニケーションが取れないことが予想されます。つまり、ことばの発信と受信がうまく機能しない状態です。

このような子どもとの対応で重要なことは、どんなに弱い発信であっても、しっかりと受けとめるよい受信ができることです。コミュニケーションを成立させるためには、発信する側の問題から始めるのではなく、受信する側の感度を上げることから始めることが大切です。

社会性の乏しい子どもに対しては、人といることの楽しさを味わうことの経験が必要です。1対1での遊び、小集団での遊び、大きい集団での遊び場面を設定して経験を深めていくことが大切です。

友達と関わろうとしません。どのようにしたらよいでしょうか。

友達と関わらない要因として、何か理由があって友達と関わろうとしないのか、友達と関わるのが苦手なのか、一人でいることが楽しいのか等が考えられます。

意図的に関わらない場合は、その理由を聞き解決していく必要があります。関わるのが苦手な場合は、うまく関わることを一緒に考えたりして具体的な手だてを見つけていきます。一人でいる方が楽しい場合は、一人の場面も大切にしながら人といることの楽しさを経験できる場面を作ります。

授業中担任の話を受けない、理解しない、立ち歩く子どもにどのように接していったらよいでしょうか

注意集中ができず、担任のことばを理解できないために立ち歩くのかもしれませんが。この場合は、教室環境を整えることです。

刺激になるものを少なくし、見て分かるように視覚支援を入れたり、見通しを持たせるためのカードを提示したりして、注意を担任に向けさせます。

発達障害ではなく反抗的な行動に出ている場合も考えられます。その場合、家庭の状

況や学校での友達関係、教師との関係を見直しながら、本人の気持ちにより添った対応をしていくことが大切です。

国語力に偏りがあり、母子ともに努力しているが、周囲の子どもと隔たりが目立ってきました。こうした子どもへの対応の仕方や学習方法を教えてください。

ここでは「学習障害」について説明したいと思います。

学習障害とは、基本的には全般的な知的発達に遅れはないけれど、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態をさすものです。

その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されていますが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、家庭、学校、地域社会などの環境的な要因が直接の原因になるものではありません。

学習障害のある子どもの学習上の課題は、認知の偏りによって生じ、異なります。そのため、支援方法も一人一人違った工夫をすることが大切です。また、その特性から、学習障害のある子どもは、ほめられ、受容されることが少なく、そのため自己評価（セルフエスティーム）が低くなり、結果として二次的な不適応行動を起こすこともあるといわれています。

教育的な配慮として、以下のことが実践されています。

1) 聞くことが苦手な子どもへの支援方法

話すときには、絵、写真、文字など視覚的な情報を使用し提示すると良い効果が上がります。また、集中しやすいように教室での座席位置の工夫なども大切です。

2) 話すことが苦手な子どもへの支援方法

体育、音楽、図工などの楽しい活動の中で、表現することの楽しさを体験させたり、自分の気持ちを表現する方法を学習したりすることが大切です。

3) 読むことが苦手な子どもへの支援方法

子どもが関心を持った本を選び、読むときには行を飛ばさないように他の行を隠すために短冊や下敷きを添えたり、さらに指で文章をなぞらせたりするなどの工夫が大切です。

4) 書くことが苦手な子どもへの支援方法

点と点を結んだり、線と線の間がはみ出さないように書いたりするなど目と手の協応動作を訓練することが大切です。文字を学ぶため文字カードと文字カードを対応させる、絵カードと文字カードを対応させるなどして、文字への関心を高める工夫なども必要です。

5) 計算や図形（推論する）でつまずきのある子どもへの支援方法

九九の表や電卓を近くに置き、具体物で操作をしたり、パソコンなどの機器を活用して学習を進めたりしてみることも大切です。文章題を学習するときは、図解などを通して具体的イメージをもたせる工夫も必要です。

アスペルガー症候群の子どもへの家庭での接し方はどうすればよいのでしょうか？

アスペルガー症候群の子どもたちは、自閉症と似た特徴を持っていますが、知能やことばの発達が良好です。難しいことばを発して、何でも分かっているように受け止められがちですが、実は身の回りの簡単な事柄が分かっていないことがあつたりします。アスペルガー症候群の子どもたちは「想像して」「相手の立場になって」「人の気持ちを考えて」ということが苦手です。このようなことから、幼稚園や学校の集団

生活の中では「変わった子」「自分勝手」と受け止められたり、トラブルを起こしたりすることが多々あります。

したがって、幼稚園や学校に通っているお子さんの家庭では、学校との連絡を密にとっておくことが大切です。お子さんの特徴や得意・苦手なことなどを担任に伝えて、クラスの中での配慮をお願いしましょう。適切な対応がなされないと、暴力や暴言、あるいは、不登校のような状況になりかねません。

家庭生活では、次のようなことに配慮しましょう。これは、一般的な事柄ですので、学校生活での配慮でも同様です。

- ・いつもとは異なる生活スタイルになるとき（レストランで食事をする、旅行に行く等）には、その予定をあらかじめわかりやすい方法で伝えておきましょう。特に、いつ見ても分かるような写真・絵カード・文字などを使用して伝えることが大切です。

- ・暗黙の了解の理解が難しい特徴がありますので、話すときには（家庭内のルールの確認や問いかけ）、曖昧な言い方や言い回しは避けて、具体的に伝えましょう。

- ・話しかける際には、必要最低限の声の大きさと、穏やかに話しかけましょう。話しかける内容ではなく、話し方のトーンや大きさととらわれ、話の内容が理解できない場合があります。

- ・苦手なことより、得意なことを認めて自信をつけさせることが大切です。冒頭にも書きましたが、いろいろなことがよく分かっているように受け止められがちですが、本当は十分ではないことがよくあります。「どうしてできないの」と言われても自分でも分からず、自己肯定感を下げってしまうことになりかねません。上記3点の配慮をしつつ、本人の自己肯定感を下げないような配慮が必要です。

以上、4点あげましたが、四六時中これら全てを行うことは難しいかもしれません。

兄弟姉妹がいればなおさらです。ご家庭の状況に合わせて、できることを心がけていきましょう。

読字障害のある子どもへの対応や勉強法を教えてください。

読字障害のある子どもには、その障害となっている要因（背景）を把握し、それに対応した勉強法が大切です。読字障害には、大きく分けて二つの要因が考えられます。視覚処理に課題がある場合と言語の処理（音韻認識）に関して課題がある場合です。

視覚処理に課題がある場合は、文字に沿って目がスムーズに動かない、または文字の形を正確に捉えるのが難しいことが予想されます。形態の認知処理が弱いと文字を識別することが困難になり、読みの誤りも多くなります。このような要因が考えられる場合は、字を読むことの学習の前に視機能トレーニングを行うことが大切です。眼球を上下左右に動かしたり、大きく円を描くように動かしたり、形を正しく認識するためのパズルなどをパソコンや教材を使って行い、視機能の向上を促します。

二つ目の言語の処理（音韻認識）に関して課題がある場合です。単語を音節や音素に分解したり、文字と音との対応が上手く出来なかつたりすると、読み書きに影響が出ます。このような要因が考えられる場合は、ことば集め・すごろく・しりとりなどを行ったり、場合によってはこれらの活動に絵カードを併用したりするなどして、文字と音との対応関係を習得させます。

読字障害のある子どもは、みんなと同じように学習に取り組んでいるのに、自分だけうまく習得できないことによる劣等感を持ったり、読めないことを隠そうとして暴言を吐いたり、不適切な行動をとったりすることもあります。学習する際には、本人が読めそうな文字からはじめ、学習意欲を高めるような配慮が必要です。

学習障害のある子どものアセスメントをしてほしい。その方法と実施していただける機関について教えてほしい。

LD（学習障害）のある子どもは、文字通り、知的能力に相応しない学習面のつまずきをもっているお子さんです。そのため、学習面のつまずきの状態を詳細に把握しておく必要があります。学習面については、まず、学校の先生にお聞きする必要があるでしょう。その際、子どもに直接行わず、間接的に評価するようなアセスメントの実施が考えられます。なかでも、広く用いられているチェックリストは、簡便なものから、診断的な結果が得られるものまで、その様相もさまざまです。LDの子どもによくみられる特徴を集めたチェックリスト、「LD判断のための調査票、LDI-R」もあります。LDI-RはLDの定義（文部省、1999）に沿った6領域（「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」）と「行動」「社会性」を合わせた8領域から構成されています。たとえば先の領域順に質問項目を挙げると、「聞いたことをすぐに忘れる」「たどたどしく話す」「音読が遅い」「独特の筆順で書く」「簡単な計算が暗算でできない」「図形を模写することが困難である」「忘れ物やなくし物が多い」「人からどう見られるか、人がどう感じるか無頓着である」などがあります。各領域につき、12項目の質問があり、領域ごとの粗点合計をパーセンタイル段階（3段階）に換算し、その値をプロットすることで、子どもの状態像がプロフィールとして図示されます。その結果、各領域が「つまずきなし」「つまずきの疑い」「つまずきあり」の3段階のどこに位置するかがわかるようになっています。さらに、各領域のパーセンタイル段階をつなげたプロフィールの形によって、「LDの可能性が高い」「可能性はある」「可能性は低い」のいずれかとして判定できるようになっています。ただ、間接的なアセスメントは、回答者（記入者）の主観に依存することも否めないもので、回答者（記入者）については、「対象となる子どもを実際に指導し、子どもの学習の状態を熟知している指導者、専門家であることが望ましい（例：担任教師、特別支援教育担当教師、教育・心理の専門家、言語療法士等）」とされています。こうし

た間接的なアセスメントが有する限界を超えるためには、対象となる子どもに接する複数の指導者が話し合いながら回答して精度を高めたり、複数の場面（指導者）ごとに回答を求めたりするなどの工夫も考えられます。

さらに精査が必要な場合には、子どもの認知特性を把握することになります。その代表的なものには、「WISC-IV知能検査」があります。WISC-IVは、全15の下位検査で構成されており、その内10の基本検査を実施することで、5つの合成得点（全検査IQと4つの指標得点）が算出されます。これらの合成得点から子どもの知的発達の様相をより多面的に把握できるようになっています。LDの定義にある「知的発達に相応しない学力」といった状態像をみる上で、こうした検査は必要不可欠ともいえるでしょう。また「K-ABC II」も開発されました。こちらは、認知処理能力に加え、基礎的学力を個別に検査できるものです。これらの検査は、十分な研修を積んだ有資格者（臨床心理士、特別支援教育士等）による実施が求められています。まずは、地域の教育委員会や教育センターに問い合わせをされるのがよいでしょう。

アスペルガー症候群と診断されている児童生徒の学校での指導方法、改善トレーニング方法等、どのように対応したら良いのでしょうか？

アスペルガー症候群は、一言で言えば知的遅れのない自閉症のタイプです。その特徴は他の自閉症と同様に、(1) 他人との社会的関係をもつこと、(2) コミュニケーションをすること、(3) 想像力と創造性の3分野に障害、いわゆる3つ組の障害を持つことで診断されます。

アスペルガー症候群の児童生徒への学校における対応について、具体的な例を示しながら説明していきます。

学校においては、上記の(1)と(2)に関わることでトラブルになることが多いと考えられます。そこで、最初に取り組んでいただきたいことは、決まり事（約束）を作

り、それを守ってもらうことを原則とすることです。アスペルガー症候群の児童生徒は、自分の言いたいことを一方的に話してしまい、それが続くことによって級友から相手にされなくなってしまうようなことが起こりがちです。このような場合は、自分の好きな事が必ずしも他の人たちが好きであるとは限らないことを折に触れて教えていくことです。また、友達が話している時には、まず、その話を聞くようにするというルールを決めて、それを守ることを約束させることです。ただ、このような事は本人にとっては苦痛に感じる事、我慢を強いられることになりますから、本人が興味・関心をもっている話題に付き合っただけの時間を別に設けて、本人の気持ちを満足させてあげるようにすることも必要です。

(3)については、こだわりという形で問題が顕在化するかもしれません。例えば、体育の授業でゲームを行ったときに、勝敗にこだわりパニックになってしまうことがあります。このような場合も折に触れ、勝つときも負けるときもあること、負けた時にはどのように振る舞えば良いかを一つの決まったパターンとして教えておくことが必要かもしれません。しかし、実際に頭で理解できたことでも感情では納得できないこともありますから、パニックになった場合の対応も考えておくことが必要です。パニックになった場合は静かな場所に連れて行き、興奮が収まるのを待ってから話しかけて起こったことの振り返りをすると良いでしょう。

いずれの場合も少しずつ我慢することを促し、自分の気持ちを平静に保つ方法を自分なりに見つけようとする努力を促してあげると良いでしょう。

ちなみに、DSM-Vになって、対人関係障害とコミュニケーション障害が1つにまとめられています。そこで、「(1)さまざまな文脈における人とのコミュニケーションと社会的関係をもつことの難しさ、(2)行動や関心、活動が限定的で反復的なこと、で診断されます。」等の表現はいかがでしょうか？

学習障害のある子どもへの接し方と将来に向けての準備をどうすればよいのでしょうか？

か？

学習障害に限らずどのような場合であっても言えることですが、障害の有無や障害の程度等に関わらず、特別に子どもへの接し方を変える必要はないと考えます。また、親御さんの中には、自分の子どもの障害のことを他の人たちに知ってもらいたいと強く願っている、あるいはそれを要求する人たちがいるかもしれません。我が子の障害のことですから熱心に調べて、場合によっては学習障害の特定の分野について専門家と呼ばれる人たちよりも多くの知識を得ている親御さんもいるかもしれません。しかし、専門的な知識を得ていればいるほど、他の人たちの子どもの見方や意識に差ができてしまうことも事実です。このように考えると、ことさら学習障害のことを取り上げて、子どもにどのように接するべきか、あるいは他の人たちに理解してほしいと願う前に、子どもを持つ一人の親として、その子どもにどのように愛情を注いであげられるのか、如何に愛情を持って接することができるかが何よりも大切になるといえるでしょう。

また、将来に向けての準備については、子ども自身が学習障害という自分の障害について客観的に理解していることが大切です。つまり、どのようなことが得意で、どのようなことに困難さがあるのか、その困難さを軽減させるためにはどのような手立てを講じればよいのか等を理解していることが大切であると考えます。

さらに、読字や書字の困難さへの対応として、ICT等を活用してそれらの困難を軽減するためのリテラシーを獲得しておくことも将来に向けて必要な事であるといえるでしょう。

高校や大学への進学に際しては、学習障害のある子どもを積極的に受け入れている、あるいは学習障害に特化したコースや学科を設置している学校についての情報を収集しておくことをお奨めします。